



Title	中国皖南都市公共スペースでの「アウトロー」農業：「県城」で生活する離土離郷人々がなぜ農業から離れないのか
Author(s)	張，曼青；胡，毓瑜；三好，恵真子
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 25-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95078
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国皖南都市公共スペースでの「アウトロー」農業 —「县城」で生活する離土離郷人々がなぜ農業から離れないのか—

"Outlawed" Agriculture in Public Spaces in the Southern Anhui Province, China: Why Do People Living in the Center of the Country Continue with Agriculture?

張 曼青^{*}

ZHANG Manqing

胡 毓瑜^{**}

HU Yuyu

三好 恵真子^{***}

MIYOSHI Emako

Abstract

With the rapid urbanization and mobility of farmers in China, some farmers are beginning to migrate to the cities. In addition, there is a phenomenon of so-called "outlawed" agriculture, where despite moving to the cities, they continue to cultivate public spaces such as lawns, green belts on roads, and vacant lots to grow vegetables for their own use.

This study focused on the phenomenon of the "outlawed" agriculture in public spaces of in the center of the country. It was confirmed that even if some Chinese farmers left the land or their hometown, they would not leave the agriculture. This study clarified that they made an effort to continue cultivating vegetables with a traditional farming method, like actively maintaining the use of fertilizers of their acquaintances by utilizing their previous experience even if they move their living space to the city due to extrinsic factors. Farmers continue with agriculture because they reconstruct "agricultural connection" and reconfirm one's identity through the "outlawed" agriculture. This phenomenon is more likely to occur in county towns, because county towns are very close to rural area physically and psychologically.

Keywords: "Outlawed" Agriculture, Agricultural Connection, Country

I はじめに

中国では、急速な都市化及び農民の流動化が進み、都市に移住し始める幾らかの農民も見受けられる。加えて、都市に移住したにもかかわらず、彼らが公共スペースである芝生や道路の緑地帯、空き地などを開墾し、自家用の野菜の栽培を続けるという、いわゆる「アウトロー」農業⁽¹⁾（閻 2019）と見なされる現象が散見される。ニュースでも多く取り上げられており、例えば、2007 年 3 月 26 日『黄石日報』では、「黄石市（河北省）において 1.32 万 m² (全体の 7 割)を超えた『農地』が取り除かれた」と伝えられ、また 2021 年 12 月 2 日『人民ニュース』でも南昌市（江西省）において「150 名の城管（都市管理総合行政執法局職員の略称）が出動し…農地 120 箇所以上を取り締まり、総面積は 8000 m² 以上に達した」と報道され、「アウトロー」

^{*} 大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程

^{**} 大阪大学大学院人間科学研究科・特任助教

^{***} 大阪大学大学院人間科学研究科・教授

農業は中国各地で発生している普遍的な現象であり、またその面積も非常に広大であることが読み取れる。

こういった「アウトロー」農業について、先行研究では、耕作者が公共的、集团的利益に関心がないという利己的な側面が指摘され（陳 2016）、常に共有スペースの「侵占（占有）」や「搶（奪い）」などのネガティブな表現で描写されている。また、「アウトロー」農業が「悪いことである」という前提で、ガバナンスの視点からそれをいかに禁止していくのかという対策面の検討もなされてきた。例えば、中国の体制移転の途中に従来のガバナンスの形骸化と新たなガバナンスの未形成（いわゆる「双軌並治」）が管理しにくい原因だと論じられている（陳 2016）ほか、「自治」と「他治」を複合させたガバナンスモデルも提起されている（劉 2019）。こうして、解決に関する議論が先行する一方、当事者の視線に寄り添い、「他者の合理性」を理解する解釈的アプローチからの研究が極めて不足しており、生活コストの削減という経済面からの議論がある（戴ら 2019）ほか、従来の農耕慣習の残存や中国農民の「土地感情」が原因として挙げられている論考（劉 2019; 戴ら 2019）に限られている。

以上より、既存研究では都市での生活スタイルや生活コストが、従来の農村における生活慣習と大きな違いがあることを強調しており、言い換えれば中国における「都市・農村二元構造」というプリズムを通して「アウトロー」農業の現象を捉えていることが示唆される。確かに中国において「都市・農村二元構造」が根強く残っており、農民が都市で一般の都市住民と同等な待遇が得られない厳しい現実が存在する。しかしながら、本稿で強調したいのは、中国の都市体系の末端である「県」が、むしろ農村側とより緊密に連携していることが見落とされている点である。第Ⅱ章で詳述するように、行政区分上「県」は、「地級市」より一級下にある都市と位置づけられているが、社会資本が市に近いほど整備されていることがほとんどである。そして農村に一番近い都市としての「県」では、こうした「アウトロー」農業がより多く見られる。それゆえに、都市と農村を切り離して考えるのではなく、「県」という視角より「アウトロー」農業に凝縮されている農村との関係も包括的に考察する必要があるのではないかと考えた。また、都市で「アウトロー」農業を行う以上は、近代的な生活環境と逆戻りの方向へと周囲環境を改変する作業が避けられない。県が農村に近いという特徴があるからこそ、耕作者が周囲環境に対する「働きかけ」の余地が普通の「地級市」や中心都市と比べて無論大きいと考えられるため、「県」における「アウトロー」農業への考察は、耕作者にとって望ましい農業のあり方や農業に対する意味付与などを理解するにあたって、より一層耕作者の内面に寄り添うことができると主張できる。

加えて、比較的裕福な農村出身の人々は自発的に都市戸籍を取得し、都市住民に転身するケースも存在するが、こういった場合には「都市・農村二元構造」はさらに適用しかねると考えられる。すなわち格差のもとで仕方なく農業をするのではなく、翻って「県」という都市空間にいかに折り合いをつけながら、いかに農業をすることができたのか、を解釈する方が適切であるのではないかということが見えてきた。特に都市において、従来の農村と同じように農業をすることは難しいと推察されるものの、本研究の調査対象者である耕作者は、さらに難しいとされる伝統的な農法を都市にて維持していたのである。よって、都市の近代的な生活環境のなかにいかにして農業、しかも伝統的な農法を維持することができたのか、またそもそも、農村や土から離れた人々がなぜ「農」から離れていないのかについて明らかにしていく必要がある。

そこで、本研究では、都市共有地の「アウトロー」農業について解釈的アプローチにより接近するが、とりわけ中国末端都市の「県」の特殊性に注視しつつ、耕作者が都市での生活を続

ける中で、いかに農業を都市空間に取り入れてきたかを考察しながら、耕作者と「農」との関係、農業及び伝統的な農法が続けられてきた深層的内実を明らかにしていく。

II 先行研究及び本研究の視座

1. 多様な「アウトロー」農業

「アウトロー」農業の現象について、多くの注目を浴びたのが「新型農村社区⁽²⁾」（「社区」は「コミュニティ」を意味する）」と「新型都市社区⁽³⁾」の公共スペースにおける「アウトロー」農業である。一方で、本稿では両者のいずれにも分類できない事象を捉えていることをまず先に強調しておきたい。よって、ここでは、まず両者に関する先行研究をまず整理してから、本研究が着目する事例がこれらの論調から区別されるべき特徴および本研究の視座を明確化していきたい。

まず、「新型農村社区建設」について、陳（2016）は『中国農村調査』において中国の「体制移転」過程のなかで、従来の行政村の自治組織（村民委員会）がなくなったのではなく、また有効な新たな社区管理委員会もまだ形成されていないという特殊なガバナンスモデル、いわゆる「双軌並治」で複雑なガバナンスの現状を説明しようとしていた。社区建設により、従来交通が便利な場所で小売業をしていた農民をなくし、農民の収入構造を「農—小売—出稼ぎ」から「農—出稼ぎ」に変えてしまった結果、農民は農業からの収入の割合が上がったとする。またこうした特殊なガバナンスの時期及び収入構造の変化により、農村社区において「アウトロー」農業の現象が次から次へと発生していると説明している。陳はこのような農業行為について、小農が「自私（利己的）」かつ「落後（遅れ）」であり、公共的や集団的な価値に関心がないと指摘している。また、陳は、小農が長年土地に依存して生きてきており、土地が農業生産に使わないこと自体が「浪費」だと考えている。すなわち、土地を農業に使用することにより、生活コストの削減を図るのみならず、土地資源を生存に活かすべきという意識が根底に動いているなど「経済的理性」と「生存的理性」の角度から再解釈している。一方、「新型都市社区」については、中国農民のもっている「土地感情」に帰結した研究がみられる（劉2019；戴ら2019）。都市周辺の農村が新型都市社区に変わったことによりもたらされてきた大きな影響の一つとして、「宅基地（住宅用地）」だけでなく「農用地（農業用地）」の土地も徴収され、農地がなくなることが挙げられる。土地に依存して生活してきた元農民は生活自体農業と一体化していたので、突然農業のみ剥離されること（「失地」）で土地への感情が放出される結果、「アウトロー」農業がコミュニティ内に現れたと示唆している。劉は「新型都市社区」の建設において、こうした「土地感情」が重視されていなかったことに疑問を掲げ、「自治」と「他治」を複合させた柔軟いガバナンスモデルで「アウトロー」農業を管理することを提起している。しかしながら、劉（2019）も示唆しているように、中国農民の「土地感情」が長らく存在する一方で、定常に保たず、むしろ「場面性（コンテキスト依存性、中国語：「情境性」）」という特徴が呈しているために土地感情を解決の糸口とする提案は、やや短絡的であるという疑問を筆者も抱いている。

以上のように、これまでの研究の多くは、「新型農村社区」及び「新型都市社区」という外側から推進してきた「都市化」政策とそれに伴った都市の地理的範囲の拡大、もしくは中国の「新農村建設」を背景とした事例に該当する。この両者の場合、外側の力によりコミュニティ形態や住居環境が激変したものの、土地感情及びそれに関わる従来の農業耕作慣習や生活スタイルが継続した結果、共有スペースでの「アウトロー」農業に至ったと説明している。しかし

ながら、本研究では、これらの2種類のいずれにも分類しきれないケースに着目したい。すなわち、経済的に比較的裕福な農村出身の人々の中で、都市で新たに住宅を購入し、自発的に都市戸籍を取得し、自ら県の都市住民に転身したケースである。都市住民の身分や生活様式を自ら選択した場合、土地感情が実際の日常生活の中でどのように反映されているのかについても考察する余地が残されていると考えた。

その一方で、関連研究の多くは、上述の陳や劉などの論考のように、ガバナンスという角度からの分析に収斂し、農業を農村の発展や都市の建設に不利な要素として取り扱い、農業行為自体も非常にネガティブに捉えており、当事者である菜園耕作者の立場に寄り添った解釈的アプローチの研究は極めて限られている。戴ら(2019)は、こういった現象について、耕作者がほとんど「陪読群体⁽⁴⁾」であるという特徴を強調し、生活コストの削減という経済面からの議論を展開している。加えて、戴らの研究は、日本側の研究(村松ら 2020; 菅 2013)と共通した点も見られる。すなわち、一般的に「アウトロー」農業が否定的に見なされるのが自明であるが、日本の川端で耕作を行う人のなかに生活困窮な社会的弱者が多く含められるため、「弱者生活権」の保全、あるいは福祉的観点から社会的弱者の生活支援などの面において「不法耕作」は機能を果たしていると論じられている。しかしこうした共通点に関して、一概にネガティブに捉えるのではなく、一般的には逸脱と見なされてしまう行為を理解し、耕作者の生活上の困窮に着目している点は重要であると筆者は考えている。その一方で、日本の河川空間という特定の空間に集まる人々の社会的属性に近似性がある点は、中国の実情とは異なり、中国における「アウトロー」農業の耕作者は、現実には戴らが注目する「陪読群体」を含め、様々な身分の人々が多様な場所で実践していることを現地調査より見えてきた。上述した先行研究では、その多様性の特徴に必ずしも十分に目を向けられてはこなかった。農民のなかで経済的に裕福な人々も多いので、農作業は単なる経済に直結した行為にとどまらない意味が存在すると考えられ、また社会的弱者および生活コストの削減に関する既存の議論は、本研究の事例には適用しかなるところがある点も押さえておきたい。

さらに、先行研究では、耕作現象の原因や工作者の社会的属性に注目が集まっているが、耕作そのものの詳細には目を向けられてこなかった。しかし農業は何ヶ月に亘る長期間の行為であり、耕作者が都市空間のなかで日常的にどのように農業に関わっているのかについて、概して見過ごされてきたのである。後述するように現地調査から見えてきたこととして、施肥の面において、化学肥料の低価格という中国の肥料市場の状況下にあるにも関わらず、耕作者はあえて入手困難である伝統的な「農家肥(農家自家製の肥料)」を使用していた。農家肥の使用は化学肥料のようにマニュアル化しにくく、農家一人ひとりの感性や主体性を必要とする(宇根 1996)ため、都市空間において伝統的な農法を維持するためには、それぞれが凝らした工夫にも目を向ける必要があるのではないかと考えられる。

なお、本研究は都市住民に転身した元農村の農民に焦点を当てるが、なかでも「県」という都市レベルに着眼する。一般に、中国の都市・農村二元構造のもと、沿海都市や省内中心都市の戸籍の取得はハードルが高いと言われている。そのため、多くの農民にとって、中国の最末端都市の「県」を踏み台として選択するのが合理的である。同時に農民と最も近い都市なため、「県」は都市と農村の関係を反映する縮図でもある。それゆえに、県という特殊な存在及びそれが「アウトロー」農業とどのように関係するかについても確認する必要があると考えており、この点を次節でさらに深く掘り下げていきたい。

2. 県域社会—「県」という末端都市

まず、県の中国の都市システムにおける位置づけについて説明する。都市戸籍を保有する市民が住むのは、県（県級市を含む）政府所在地の県城が最末端であり、それ以下の郷・鎮政府所在地の住民については、政府関係者や公務員を除いて基本的に農村戸籍である。戸籍で区分すれば、県（県級市を含む）政府所在地の県城とそれ以上は都市であり（市の「区」と県と行政レベルは同級）、それ以下の郷・鎮・村は農村となる。なお、「県域社会」というのは、県城及びその周囲の県域に広がる農村のことを指している。農民が住む「村（行政村）」は官僚制行政位階体系だけでなく、市場中心地の位階体系においても末端に位置しており、農民は常に「鎮」、「県」、「市」のように位階の上部へ移動して消費活動などを行う必要がある。県に行けば、大学以外ほとんどのインフラ・施設が完備しており、従来のふるさとや市へ移動も便利である。なにより県の都市戸籍を取得するためのハードルは低い⁽⁶⁾。本研究は「県」に着目する理由には以下の2つがある。一つに、県城と農村との格差が小さいこと（農村と最も近い都市）、二つに県域の比重の大きさと独自性（中国人の大部分が暮らす地域社会である。県域の数は2800以上で、中国国土の94%を占め、全人口の70%）である。そのため、県が農村に最も近い都市といわれている。

こうした県域社会は、経済学分野において研究が進められてきたが、社会学では注目度は高いとはいえない。社会学分野において類似する研究には中国東部沿海地域の都市周辺部の「第3空間」、すなわち、都市と農村の狭間にある地域がある（季2011⁽⁶⁾）。一方で、県は都市と農村を連結するような中間とも言えるが、都市における「第3空間」との違いは明らかである。つまり、「第3空間」は、中国社会の戸籍制度による差別問題などを反映しているため、季も強調しているように、「究極的な目標は第3空間の縮小と早期消滅」である。この点において、第3空間と、本研究で扱う農民が出身地の県城に移住することによる新たな生活空間の創造とは真逆なものとして位置づけられる。県城に移住すること、もしくは「県城人」になること自体はインフラがより完備な都市で暮らせることを意味するだけではなく、「都市化率⁽⁷⁾」の向上にも繋がるため、社会的にも制度的にも良い傾向とされている。

一方、「県」というのは、季が指摘する「第3空間」とは異なり、農村との地理的距離も近いほか、農民が周りの「市民」と「心情的差異」はあまり感じない⁽⁸⁾。すなわち、県の市民の多くは周辺農村からきた農民の人々が多いので、「アウトロー」農業をしていない周囲の人々の考え方も全く異なる。また、県は発展途中の末端都市であるからこそ、建設中の空間が多く存在しているため、「拆迁（立ち退き地）」の存在が「アウトロー」農業に可能な場所を提供している。また川瀬（2019）は、農民がいかに都市を捉えているのか、特に農民の語りのなかの「都市」について考察している。具体的には、農村の農民の日常的言語実践において、二分法のレトリックが使用されているが、それは対比・対立というより、むしろその境界線自体が場面により揺れ動いていると論じられている。川瀬の指摘のように、都市に移住した農民たちにはこのような境界線の場面性はもちろん存在すると考えられる。その一方で、本調査で見られたように、同時に都市と農村での生活経験をもち、さらに「アウトロー」農業をすることは、都市においてあえて農民としての一面を前面に出すことになるので、言語を超えて、都市と「農」の関係を実践のなかで摸索していると考えられる。したがって、都市住民に転身した後も、従来の農村地域と切り離れた「新都市住民」と見なすのではなく、また経済的劣勢に立たされる「都市農民工」でもなく、農村との関係を包括的に考察し、都市での生活に埋め込まれている農業を見ていく必要がある。

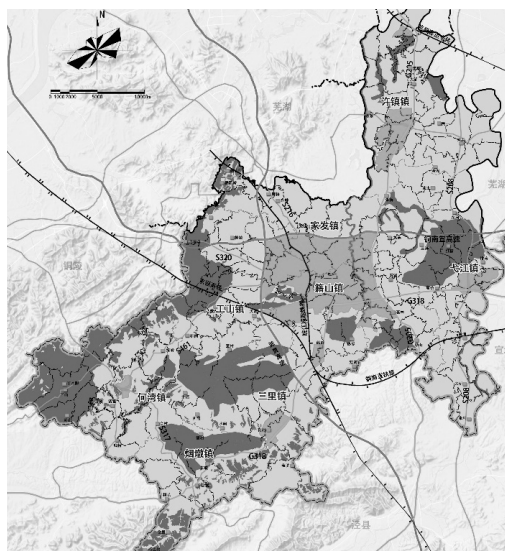
以上を踏まえ、本研究の目的は、中国の末端都市である県において「アウトロー」農業の現

象に対して、特に施肥や水遣りなど日常的な管理行為といった農業の詳細を整理したうえで、耕作者が都市での生活を続けるなか、いかに農業を生活の中に取り入れたのかを考察し、耕作者が続ける深層的実を理解していくことにある。

Ⅲ 調査の概要

1. 調査地

本研究の調査地は、中国安徽省南部の南陵県である。安徽省は江南地域（長江以南の長江デルタ平原地域、安徽省南部を含む）とも言われ、気候も全般的に中国内で最も温和であり、本地域の米の2期作を規定している。自然条件及びそこから生じた資源に恵まれ、長江デルタ地域は農産物と水産物の豊富さにより「魚米の郷」とも呼ばれてきた。安徽省南部はまさに「魚米の郷」の代表地域の一つである。一方で、農業生産の発展には優れた自然条件に恵まれているものの、決して農業生産がまったく変化なく安定的に発展してきたわけではない。特に近代化政策の影響の元で、さまざまな変容の一面を見せてきた。まず、安徽省は全国に先立って農業生産請負制が始まり、その後、統派購制度も遂行され、農村の余剰労働力が出現した（陳2007）。よって職を求めるための「農民工」としての都市進出や農村の郷鎮企業に勤めるような「離土不離郷（土地から離脱しても郷を離れない）」といった道が余剰労働力の受け皿となっている（王2017）。安徽省では、上海市など沿海都市に地理的な近距離と大きい賃金格差という原因で、特に出稼ぎによる農業労働力の流出が多く、毎年約1200万人が他省に出稼ぎに行っている（梶田2012）。したがって農業人口が激減してきており、2014年農業生産に従事す



（左）図1. 安徽省の位置図（Baidu map より）

（右）図2. 安徽省蕪湖市南陵県の県城と周辺鎮との位置関係（『南陵
県城総体規画 2013-2030』より）

る農村労働力人口は1376.1万人であり、全体の3363.8万人の40.9%しか占めていない（姚2015）。本研究では、農業の歴史が長いことと近年農民の流動化が進んでいる地域の縮図といえる安徽省南部の県を調査地として選んだ。

南陵県は安徽省東南部にある蕪湖市の南部に位置し、西南の皖南丘陵地帯から東北の沿江平

野への移行する地形となっている。全体面積およそ 1263.7km²で、人口は 55.6 万人（県城内 27.8 km²、人口 18 万人⁽⁹⁾）である。2021 年時点で県が所轄する鎮は 8 個、「社区⁽¹⁰⁾」は 23 個、そして行政村は 149 個である。省レベルの経済開発区は 1 ヶ所もっている。使用言語は主に標準語と呉語であり、日常生活において方言が使われるのが一般的である。

2020 年南陵県の実業戸籍住民（城鎮住民）の一人当たりの平均所得は 40213 元であり、農村戸籍住民の一人当たりの平均所得は 26586 元である。県の常住人口のうち、城鎮に居住する人口は 232557 人（53.94%）、郷村に居住する人口は 198591 人（46.06%）であり、2010 年の第 6 次全国人口センサスと比べて城鎮人口の比重は 18.86%向上した（2020 年 11 月 1 日零時時点、南陵県第 7 次国勢調査広報）。

2. 調査概要

調査対象地である南陵県の県城内では、県城にある複数の人々が共同で「シェア」している大面積の「共有地の農地」のほか、コミュニティ内の公共花壇といった点在するものもある。よって対象者の農作業の場所、規模、種類、継続時間および社会的属性は多種多様である。その多様性を念頭にいれつつ、5 人を調査対象者とし、現場の「アウトロー」農地に一緒に参与するとともに、半構造化インタビューを 1 人ずつ 1 時間以上行い、そのうち特に A と B へのインタビューは複数回（あわせて 3 時間以上）行った。具体的な調査日程は 2019 年 9 月 6 日～2019 年 9 月 13 日と 11 月 24 日～12 月 2 日（肥料農法を中心に現地調査、対面式聞き取り調査）、2020 年 8 月 15 日～8 月 31 日（「アウトロー」農業を中心にオンライン聞き取り調査）、2021 年 11 月 15 日～17 日（「アウトロー」農業を中心にオンライン聞き取り調査）の 3 回に分けて行った。なお、調査対象者の共通点として、5 人とも農村の出身であり、農村で生活を送った時期が長く、農業に非常に親しみを持つことである。調査対象者のインフォーマント一覧は表 1 にまとめた。

表 1. インフォーマント一覧

調査対象者	移住の きっかけ	農地の場所	農作物種類	注
A 氏 (70 代、女性)	「陪読」	①自分の住むマンションの花壇、 ②庭園（A さんが 1 階に住んでいる） ③川端	ほうれん草、パクチー、カラシナ、カリフラワー、チンゲン菜、かぼちゃ、唐辛子、なす、冬瓜、サヤインゲン、ヒュ（莧）など	息子と旦那が江蘇省無錫市で働き、無錫市でマンションを 2 つ購入している。
B 氏 (40 代、女性)	「陪読」	①古城壁遺跡公園の建設のための「拆迁地（立ち退き地帯、川付近）」 ②辺鄙な空き地	チンゲン菜、ほうれん草、パクチー、にんじく	南陵県の最も高級なマンション群「碧桂園」で住宅を購入、蕪湖市にもマンションを購入している。

C氏 (80代、男性)	仕事（農業は退職後開始）	①花壇 ②辺鄙な空き地	菜秧子（鶏毛菜、小白菜、日本のつまみ菜に近い）、大根、にら、サヤインゲン、茄子、唐辛子、ねぎ、ステムレタス、セリホン（雪里紅、カラシナ）、ヒユナなど	安徽省内有数の大学から卒業し、県委党校（共産党員を教育・訓練する場所）のリーダーとして働いてきた。
D氏 (60代、女性)	「陪読」	辺鄙な空き地（前の「陪読」者から「受け継いだ」土地）	にんにくの芽、パクチー、ヨモギなど	
E氏 (70代、男性)	仕事（小売商店、今も継続）	立ち退き地帯（辺鄙な空き地）	チンゲン菜、ステムレタス、サヤインゲン、インゲン豆、胡瓜、黄瓜、ひょうたん、ヒユ、キャベツ、枝豆、サツマイモ、ごま、落花生、かぼちゃ、唐辛子、茄子、トマトなど（「なんでも植える」とE氏が言う）	90年代から県城に移住しはじめ、商売をやってきた。

IV 「アウトロー」農業の現状及び農法の継続

まず、本節では南陵県における「アウトロー」農業の現状を整理していくが、その前に、調査対象者それぞれの都市での生活について、簡単に紹介しておく。A氏、B氏、D氏は同じく「陪読（A氏とD氏は孫の陪読、B氏は息子の陪読）」のために県に移住しており、夫や息子は出稼ぎのため、一緒に暮らしていない。生活が孫や息子を中心に展開していることが「陪読」者の特徴であり、孫や息子のご飯、洗濯などの世話をするほか、毎日送り迎え⁽¹¹⁾もしている。C氏は定年退職後、「県」で生活し、野菜を趣味のように閑暇の時にやっている。E氏は1990年代より県に来ており、今でも小さなお店を経営している。

1. 限られた空間における野菜栽培

現地調査から、農地が所在する空間は大きく2種類あることがわかった。まず、代表的なのが一面に広がる比較的に広大な農地である。このような農地は、一般的に都市建設のために土地や家屋が徴収され、住民も立ち退きを強制されている「拆迁地（開発のために地域全体の建物や施設などを取り壊し立ち退く地帯）」の近くにあることが多い。B氏とE氏がその例である。例えば、B氏の農地の場所は南陵県の古城壁遺跡公園（「老城牆遺址公園」）の建設予定地だったが、住民の立ち退き及び整地工事が終了後、公園の建設事業が紛争により停滞していた。近くに住んでいた住民（B氏も含めて）がその空き地に1人ずつ2〜3列うねを立て始めている。それから、もう一つの類型は花壇、川の周辺、辺鄙な路地裏の土地など小さく、県城内の各隅

に分散している農地である。「土を見かけたら、耕したくなる」と調査対象者が、挙って言うように、それは都市（県城内）で「拆迁地」のような広大な土地があまりないため、限られている空間において使えそうな露地があれば、それを耕して野菜を植えてみる試みを繰り返した結果である。図3で示しているのはA氏のいくつかの場所に分散している農地の様子である。A氏は自分の住むマンションの花壇、庭園、川端、空き地などで野菜を栽培したことがある。ただし「アウトロー」農業をしている人々は複数の農地を同時に耕していた時期もあるが、農地が整地されたり、新たな場所を試したりするという「動態的な農地保有」がむしろ常態である。

こうして限られた空間とはいえ、農作物の種類は大根、チンゲン菜、ほうれん草、パクチー、カラシナ、カリフラワー、チンゲン菜など多様で（表1）、空間の制限がある中で、できる限り農村と同じように、現地の家族の食卓に通常並ぶ野菜を作っているのである。また、野菜の栽培を通して、農事暦と近似するような時間感覚にて生活を送っていることがわかった。インタビューの際、耕作者は常に旧暦を意識して回答しており、農村と同じように季節に合わせて野菜を作っていることが読み取れる。旧正月と立秋⁽¹²⁾を境目に、「上半期」と「下半期」と分けられている。例えば、以下のような語りがあるように、耕作者が野菜を植えた季節・時間はもちろん、収穫する・食べる時も意識して栽培している。

「なぜこの野菜を栽培するというより、その季節になったら、その野菜を栽培したのね…」
（A氏の語り）

「上半期はインゲン豆、なす、唐辛子など、今は全部食べたけど…ステムレタスやセリホンは下半期に植え、上半期になるとステムレタスを食べ、セリホンは漬物にしたり、干し物にしたりして…食欲のないときに、セリホンと豚肉と一緒に炒め物にしている…」（C氏の語り）

「菜秧子を今（2019年9月）植えているが、ちょうど旧正月は食べ頃…正月の時それを食べるのがとてもいい。菜秧子おいしいよね、うちの家族が今は野菜が大好きで、お肉の料理を出しても食べないが、菜秧子の炒めを出したら、すぐなくなってしまう…」（D氏の語り）

2. 「期間限定」の農業と非対抗的対峙

こうした限られた空間における野菜栽培であるが、ほとんどの人が「近い将来にいつか終わる」という覚悟を持って、「期間限定」の農業をしていることも分かってきた。ここでいう「期間限定」には2つの意味があると考えられる。ひとつは、自分のライフステージにおける「ある期間」に限定する意味を持つ。例えば、公共スペースで農作業をする人の大多数を占めるのは、「陪読」の高齢者/主婦であり、彼らは子供が県の中学校・高校を通う3年～6年の間という期間だけ「アウトロー」農業に携わるのである（A氏、B氏、D氏）。また、C氏のように、退職後農的暮らしを営むという都市での「部分的田園回帰」する人もおり、体力的に対応できる時まで続けるというように、いつか中断することを承知している上での農作業である。



図3. 花壇に植えられた「菜秧子」

そして県での農作業する場所は農村とは異なり、「期間限定」であるからこそ代々受け継がれていく土地ではない。都市の公共スペースの土地を新しく開墾するか、期間が終わった人から



図4. マンションの裏側の空き地に
植えられた野菜と肥料バケツ

農地を無料でもらう。こうした農地の受け継ぎは常に自分と同じような農村出身の人に無料で譲っており、D氏はその例である。またD氏も農地を「受け継いだ」と、それを自分のものとして認識しているのではなく、「(都市で)農地を持つはずはない」、「前の陪読の人からもらい、やらせていただいた」といったD氏の言葉にあるように、しばらく借用している気持ちで農地を耕しているのである。

もう一つは、こうした農作業は行政からみればアウトロー的な行為であり、規制が強化される際に随時政府の人に強制的に除去される恐れが伴っているという意味も伴う。一方で、彼らはそれに怯えながらも、柔軟に適應できるように常に備えていた。聞き取りの際、在地の人々はよく以下のような論理、あるいは戦略も持っていることが分かった。

「大丈夫。今やっているのは、この地域の「拆迁」はまだやっていない。もし始まったらまた(やめる)。この土地は国から分配してくれたものではない。彼(「他人」という意味で使う)の土地であれば、彼は農業をやればいい。新しい建物を作るのであれば、作ればいい。犯罪でもないし、大丈夫よ。そこは空いているしね。以前土地を開発するときに、土地を買ったとしても民衆に告発されたこともある。逆に俺がここで野菜を作るのは各方面にもいい影響がある。環境など各方面にいい。彼(「開発側や周囲の人」)に迷惑を掛けなければいい。」(E氏の語り)

「そこ、『老城壁』公園を建設する話があるじゃない。だめと言われたら、やめればいい。でも今お金でもめているらしいので、しばらく(その辺の土地が)ほっとかれる。ほっとかされると、みんなそこでちょっと野菜を作ってみた。今寒くなったので、大丈夫…もし取り除かれたとしても大丈夫。取り除かれなければ、ちょっとやって食べる。」(B氏の語り)

「作れば作る。条件があれば、続けたい。」(A氏の語り)

このように、行政に除去されるまでの間に何とか続けるという「期間限定」の農業として受け止めている。自分の土地ではないとしっかり認識しながらも、使用しない土地は浪費であると考えている。また、たとえ使用権を取得したとしても民衆から反対されたことがある。逆に自分の野菜のほうがきれいに作って、環境にいいし、また自分以外の人に迷惑を掛けないことが原則である。だめと言われた時もすぐ受け入れてあきらめる。こういった論理で動いており、人々は自分の「アウトロー」農業を正当化しようとしていることが推察される。

加えて、規制と真正面から対抗するのではなく、そのつど柔軟に対応している。例えば、A氏は可能な限り、自分の住むマンションの花壇のほか、自分の庭園内や川端にあるいくつかの零細な農地を持っている。2020年に南陵県において、河川的环境環境の整備⁽¹³⁾が始まったことにより、A氏の川端にある農地は撤去されたが、花壇や庭園内の農地は未だに続いている。こうして農地を分散させることは規制強化に対する予備対策として機能している。また、C氏の場合、野菜を植えていた花壇が整地される前に、野菜をプラスチックのバケツなどに移植することなどを通して、農作業を「最後」までやり続けようとしている(図5と図6)。



(左) 図5. 「アウトロー」農業が取り除かれた後の花壇 (2020年8月撮影)



(右) 図6. 花壇の野菜をバケツへ移植 (2020年8月撮影)

さらに本稿で「非対抗的対峙」を称しているのは、耕作側のみならず、管理する側も実に柔軟に対応していることをここで強調したておきたい。B氏⁽¹⁴⁾の例からこうした県での「アウトロー的農業者」と「管理側」との非対抗的関係を読み取ることができる。公園が建設された後、本当の管理側は政府（城管局など）であるが、実際直接公園付近の住民と毎日のように関わるのが、公園の剪定や清潔など担当する環境衛生労働者（「環境工人」）である。B氏は環境と日常的な付き合いで「交情」⁽¹⁵⁾があり、政策に基づき農地が撤去されることを理解している。それと同時に、環境も農村の出身者がほとんどであるため、「アウトロー」農業自体への理解や同感ひいては同じ農村出身者としての「羨望」の気持ちをもっているという。つまり羨望というのは仕事の立場では自分ができないためである。お互いに理解し合ったうえでB氏の「アウトロー」農業は、ほとんど「下半期」（秋分後から春節前まで）だけで行うことになっている。年の前半（春夏）になると政策が厳しくなるため、現状としてお互いに「迷惑をかけない」ように「毎年の前半はやらず、後半、特に春節直前は大丈夫」という暗黙のルールのようになっている。

「…毎年の後半なら大丈夫。この前水遣りに行ったときに環境に言われたのだが、『年末(春節の前)はいいが、来年の春になるとやめたほうがいいよ。ここはやはり国家の土地であり、そのとき(春夏)もしここを全部取り除いてしまったら、むしゃくしゃするだろう。』って、それで『ありがとうね。兄貴ありがとうね』って。その環境と日常的に付き合いがあつてね、うね(の野菜)だけなら許されている…」(B氏の語り)

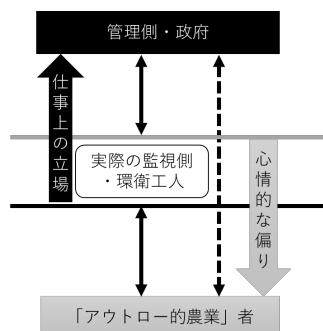


図7. 非対峙的対応における関係者の構図 (B氏の例)

3. 「農家肥」の主体的選択及び農作物の用途

一方、肥料の使用についても特筆に値すると言える。筆者のこれまでの研究において、調査地の農村地域における施肥慣習及びその変容の経緯について整理してきた。紙幅の制限で変容の詳細過程を省くが、調査時点において野菜に対して農民の「自家製」有機質肥料（中国語の口語では「農家肥」⁽¹⁶⁾）という）を主要な肥料とする慣習が未だ普遍的に存在していることを強調したい。また、一部の農民が都市に移住した後も従来の施肥慣習を続け、おおむね農家肥を主で、稀に化学肥料を補足として施肥している（表2）。

A氏、B氏とD氏の場合、都市でウォッシュトイレが普及したにもかかわらず、あえて専用の容器（御虎子）を使い、農家肥の原材料となる家族の小便を貯めている。およそ3倍～10倍の水で希釈・発酵するが、その度合いの把握が長年の経験に基づいた勘でやっているという。その希釈・発酵後の液体で水遣りを行い、野菜の生長に追肥として十分な肥効を与えている。また、土をひっくり返して、豚と鶏の糞で敷いて、「元肥」とする。鶏糞は県内で購入できないため、農村にいる知り合いの飼育者に頼んでいる（中国の中小県城では商品化した堆肥が市場で入手できないのは現状である）。さらに、C氏とE氏は農家肥を求めるために、菜園の後ろの空き地で簡易なトイレまで手作りし、排泄物を収集している（図8と図9）。一般的に元肥には最も良いのは鶏糞や羽毛などの農家肥であると調査対象者が共通に認識しており、D氏以外はみんな化学肥料を一切使用していない。D氏は入手ルートがなく、現在元肥にだけ少し複合肥料を使用している。すなわち都市に移住したとしても、農村の農業と同じ施肥慣習を維持しており、特に農家肥の使用を続けるために、実は農村空間よりさらなる工夫が必要である。

表2. 肥料の使用状況（調査により筆者作成）

	肥料種類	量	施肥の方法
元肥	知り合いの養鶏場から購入した鶏糞（D氏だけ化学肥料を使用）	1袋（量が不確定）	土作りに
追肥	家族の小便	状況により	3倍～10倍の水で希釈・発酵 毎回約500ml～1000ml （長年の経験に基づいた勘）



図8. C氏の作った簡易トイレ
（2020年8月撮影）



図9. E氏の作った簡易トイレ
（2020年8月撮影）



図10. 自分の農地の隣に立って紹介E氏（2020年8月撮影⁽¹⁷⁾）

そして収穫した農作物は自家用のほか、余った分は全て知り合いや親戚に贈っており、販売したことは一度もなかった。贈る対象には、農村で知り合った親戚や知人のほか、自分と同じように農村からきて都市で農作業をしている人々とも自然に農業と農村に関わる会話が始まり、そして日常的な接触の中で親しくなったため、お互いに自分の作物を贈りあっていることもよくあるという。B氏がインタビューの際に特に公園予定地の農地が取り除かれる前の有様を非常に独自の表現で「子供の送り迎えする保護者」みたいな光景とその様子を表している。詳しくは以下の通りである。

「すごかったよ！放課後子供を迎えるために学校の正門の前で待つ保護者が集まっていたみたいに、碧桂園ではたくさんの人が（農業を）やっているのよ、みんな 80%農村からきたと思う。隣のお婆ちゃんもいつも言っているように『何もない時に菜園にただ野菜を見に行くだけでも気分が良くなるわ』と…この前、天気が乾燥だったので、毎日夕暮れあたり、あなたもバケツを持って、彼女もバケツを持って、全部水遣りに農地に行くね。水遣りしながらおしゃべりする…」（2020年8月B氏へのインタビューより）

「皆色んなところから来ている。今はもう取り除かれて、人が見えなくなった。野菜を育てていた時、『そっちはどんな野菜を育てているの』、『野菜が食べきれないので良かったらうちの畑から野菜を取って』って、違う野菜を栽培しているのであれば、『うちのこの野菜は要る？こう料理したらおいしいよねとか、取ってね』とお互いに話し掛け合っていた…以前夕方ごろ菜園に行くと、人がたくさんいて、結構長くしゃべる。今は1人も会えなくなった。お喋りする時はとても面白かったよ。夕方4、5時のとき、バケツを持っていけば、そこでみなさんとお喋りしていた…」（2021年11月B氏へのインタビューより）

上記の語りからわかるように、農業をすることは自分や自分の家族内で完結する行為であると調査対象者の耕作者が認識しているわけではない。特に野菜を育てていくなかで、自分と同じような行為をしている人との野菜や食事に関する交流が行われており、さらに野菜の収穫後もお互いに贈与し合うこともわかった。また、B氏自身は「陪読」の保護者というもう一つの、都市における主な身分も持っている。みなさんを学校の前で待つ保護者と比喻しているのは、ただ集まっていることが似ているというより、むしろ子供を迎えるという中国における普遍的な現象のように、「アウトロー」農業が個別的な現象を超えた集会的な行為であることが含意されているからである。一方で、その交流が「農地」ありきのものであり、農地が取り除かれたら、その場で「解散」したように、無くなることも語りからわかった。逆に言えば、あらたな農地ができれば、またその時に新たな交流や人間関係が作られると考えられる。

V 考察—県域社会における「アウトロー」農業の伸縮性

1. 県域社会における「アウトロー」農業の特徴

本研究では、県域社会の「アウトロー」農業を対象とした。上述したように、県域には農村地域と県城が含まれる。県城は農村に近いが、耕作者は農村から県城に移住後、農村と同じように農業をやることはできない。そもそも、県城に移住する理由やきっかけはほかにあり、つまり、仕事や陪読といった「県」における主たる活動である。耕作者がその活動を完成した後各々の隙間で「アウトロー」農業をしている。また、県域には自分自身が所有する農地はもちろん、「正式」に農地と言える場所もほぼないのが現状であり、耕作者は辺鄙なところにある

未使用な露地や開発中の「拆迁地」を開墾して、一時的に農地として利用している。これは規制上「アウトロー」であり、随時政府の規制にも対応しなければならないが、現実には、彼らなりに「非対抗」的なやり方でうまく対応できている。このような、形式上の多様性および種々の状況へ順応できる柔軟性などに鑑み、「アウトロー」農業の「伸縮性」という特徴が見えてきた。伸縮性というのは「アウトロー」農業が社会状況に合わせて伸びたり、縮んだりするしなやかさを有することを意味する。前述したように、農地は分散しており、また耕作者が動態的に土地を保有しているところも伸縮性により説明することができる。また、「アウトロー」農業をするかしないかは、管理側との関係性や農地所在地の状態を全て考慮したうえで、「この場合ならやってもいい」あるいは「この場合ならやらない」と決めているように、常に「伸縮」しているような状態にあると言える。また、こうした「伸縮性」特徴から、農業の主体性があからさまに表されている。つまり耕作者が県城の「アウトロー」農業と従来の農業が異なることを考慮した上で、独自で考えに基づき、自ら判断して行動するのである。

さらに述べるならば、農村での農業と比較すると県城の「アウトロー」農業のほうが様々な困難に直面する可能性があり、また移住者にとって農業から離れても生計が成り立つにもかかわらず、あえて農村空間以上の工夫をして非経済的な「アウトロー」農業をしているのである。特に施肥の面において、化学肥料の低価格という中国の肥料市場の状況下、調査地の耕作者は伝統的な「農家肥」を使用していることが調査によりわかった。前述したように、マニュアル化できない「土台技術」(宇根 1996) だからこそ、農家肥の使用は農家一人ひとりの感性や主体性が不可欠になる。それゆえに調査対象者である耕作者はいつ、どのぐらい、どのように農家肥を与えているのかについて、すべて自分なりに現実の種々の状況を考慮した上で独自で考え、判断しているのである。また、県城において農家肥の利用がそれ以上の工夫が必要であると調査からわかった。したがって、農民は都市に移動したあと、環境の制限下農業への執着が後退するのではなく、こうした「アウトロー」農業を通して、むしろ農業における伸縮性ひいては主体性が顕在化し、さらに彼らの「農」(生計手段としての「業」を超えて) そのものへ執着が見えてきた。

2. 「アウトロー」農業を通じて農的つながりの再構築

こうした「農」への執着について、生活コストという面から解釈されている先行研究もあるが、本研究において調査対象者が比較的に経済的余裕をもつ農村出身者であり、より良い教育資源あるいは生活を求めるために県に移住しているケースを取り上げた。家族にほか現金収入があるものの、すでに定年退職した高齢者がほとんどであるし、収穫した農作物も販売用にしたことはないため、生活の糧で「アウトロー」農業を行うのではないと言える。また省力的かつ低価格の化学肥料ではなく、手間のかかる農家肥を使用することからも、農業を通して生活コストの削減を追求するわけでもない。以上の調査結果を踏まえて、「アウトロー」農業は耕作者にとって、確実に経済的意味を超えていることがわかった。すなわち、農業は従来主たる生業であったが、都市での農業の性格が異なり、それ自体がマイナー・サブシステム化していると言える。だからこそ、先行研究で議論されている経済・収入面だけでは捉えきれず、収入増や生活コスト削減より深い意味合いが存在することが示唆された。

その意味合いについて、さらに本稿では「農的つながりの再構築」として解釈していきたい(図 11)。都市に移住した農民たちは農的暮らしを継続することにより、従来の農村コミュニティの親戚や知人との関係を新しい都市の生活空間でも維持することができた。例えば、収穫した野菜の一部を従来の知り合いや親戚に贈与しているほか、元肥に堆肥を使用するために農

村にある知り合いの飼育場から有機肥料を入手している。そのうえで、都市で自分と同様に土地に身体経験や愛着を持つ農民と出会い、同じく「アウトロー」農業をする人と自然に「農」や食卓に関する日常会話が農作業をする度に発生し、農作物の送り合いも頻繁にされている。都市空間や近代化に伴う食行動のタコソボ化 (compartmentalization) (秋津 2014) とは真逆なこの現象は、「アウトロー」農業から派生して生じていると言える。また、農地の受け継ぎも農業に共感をもつ人から無償で「譲渡」され、「期間」が終了した後にまた他の人に無償で渡している。これらの行動を通して、都市空間に新たな「農的つながり」あるいは「農的コミュニティ」を自ら繰り返し再構築しているのである。

なお、本研究で提起する「農的つながり/農的コミュニティ」は先行研究で論じられた「土地感情」といった極めて象徴的・抽象的解釈とどう異なるのかについても議論しておく必要がある。この点に関して、コミュニティを「人々が状況に応じて自らの生を作り変えようとする実践の場」として描いてみた「実践としてのコミュニティ」論を参考にしたい。コミュニティの象徴的構築の側面(「想像のコミュニティ」)も人々の対面的な相互行為の側面も重視している。例えば、移動により既存のコミュニティが変容する一方で、新たなタイプのコミュニティも出現する際に、「個人は場所や文化的アイデンティティや出身国をただ想像するのではなく、それらを身近なコミュニティとの関係を通じて実践に経験し、その経験がより抽象的で一般化された観念としてのコミュニティの基礎となるのである」(平井 2012)とする。本研究では「アウトロー」農業の実践、具体的には農家肥の使用や農作物の相互贈与などといった日常的な相互行為を通して、「農民」としてのアイデンティティを再確認し、自分たちの慣れない都市での立ち位置を発見できていると考える。この点に関して「土地感情」という抽象的なものと区別することは自明である。

さらに、農家肥の主體的な選択に立ち替えてみると、たとえ都市での農業が「期間限定」であっても、また農村空間より更なる工夫が必要であるとしても、それでも利便性の劣っている伝統的な農家肥を選択していた。それは、農家肥が単なる経済的な価値と直結する肥料/道具を越えて、実は自分の中の「あるべき食と農」を反映するシンボリックな存在である。彼らの視点からみれば、農業全体がマイナー・サブシステム化してきており、農家肥の使用を含めた農業が本当の農業であり、農業をしていることこそ「自分自身」である。「アウトロー」農業は経済的利益を超えて、日常的な農的クラシの実践を通して新たに農的つながりを自ら構築していくことにその意味が存在する。

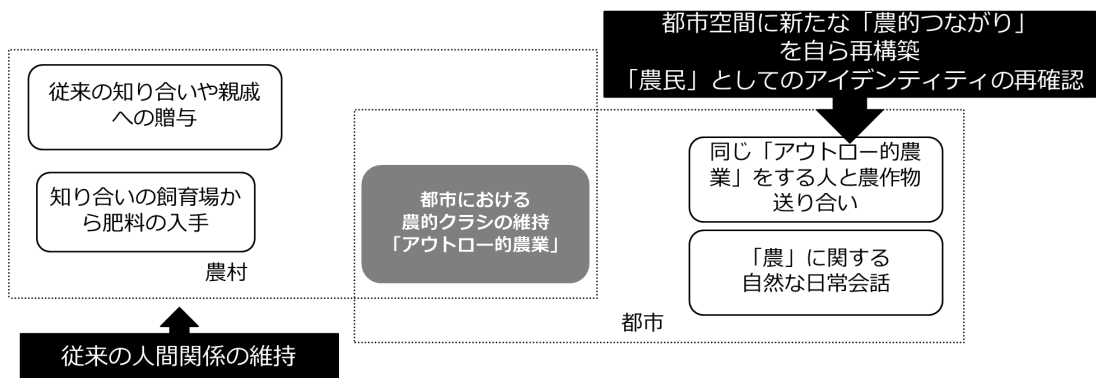


図 11 都市（県城）における農的つながり

なお、本稿では「農的つながり/農的コミュニティ」を提示したが、境界線が明確な共同体/コミュニティは中国において存在せず、「非境界の世界」と言われてきた。一方で、非境界は無

境界や反境界とは異なり、「非境界的集合」と称されてきた江南農村の人々の生活における生活リズム（「韻律」）をもっており、人々は時と場合に応じて、様々な基準で自己と他者との間の関係を構築している（川瀬 2019）。本研究では、都市に移住してきた後にも、社会的状況に応じて「伸縮」している非境界的集合（伸縮する農的つながり）を県域で「アウトロー」農業を通じて自ら生成していくことも見えてきた。農業が終わる時に、「農的つながり」もさっと消え、また新たに別のところで「農的つながり」が構築できるように、「農的つながり」も実は状況依存的で、上記したように伸縮可能なものであるのではないかと考えている。状況依存あるいは伸縮可能であるからこそ、そこで形成していた農的つながりが従来の農村社会の非境界的集合と比べて、更なる即時性/場面性があると考えられる。

3. 県域社会における「離土離郷不離農」

上記した「アウトロー」農業の「伸縮性」および「農的つながり」から「県」が農村から区別する特徴を議論してきた。一方で、「県」は「市」とどう異なり、もしくは「アウトロー」農業において「県」はなぜ特別であるといえるのかについて本節で深めてみたい。

中国社会の農民の流動化について、職業や物理的居住地の変化の有無により「離土又離郷」、「離土不離郷」、「離郷不離土」、「不離土不離郷」として表現されている（前田 1998）。本研究が着目する都市における「アウトロー」農業は、「離土又離郷」に近いが、土地や故郷から離れても「農」から離れていないので「離土離郷不離農」といったほうがより適切であると考えている。ここでいう「農」というのは農業そのものを超え、今までの農的くらしで築かれた農村での人間関係、さらには自分と同じ経験を持つ農村出身の人との共感による新たな「農的つながり」を意味している。都市という場所において、場面にに応じて時に「農的つながり」を自ら生成していき、農に執着した一面を見せているのである。

一方で、こうした「離土離郷不離農」の形成には必要条件があり、県域社会だからこそ、このような状況になっているわけである。すなわち、行政管理、物理的環境と心情的受容という面において県は都市と異なると言える。都市は「アウトロー」農業に対する行政管理上の厳しさが増しているほか、「県」のほど建設途中の「拆迁地」は多くないため、都市において物理的に農業ができる露地環境が少ないと考えられる。さらに重要視したいのは、都市（県城）への移住とはいえ、「県域」内での移動であり、物理的な距離も心情的な距離も自分の出身農村と最も近い都市である。そのため、農業にまつわる従来の人間の関係の維持も、都市空間で「アウトロー」農業を通した新たな農的つながりの形成も無理なく自然に出来上がっている。公園の「環衛工人」という第3者側も、心情的に耕作者に偏っており、容易に同感しているため、両者の間は暗黙のルールのように非対抗的対峙になったのである。いずれも「県域社会」がゆえの「農的つながり」であると言える。

ただし、ひとつ留意しておかなければならないのは、「県」にのみこうした「アウトロー」農業や「農的つながり」が存在するのではないということである。「県」ではそうした「農的つながり」が形成されやすく、耕作者と「農」の関係が凝縮されているのである。本研究は、これから中国の農村・農民研究において「県域社会」という新たな視角の実用性を実証したものとして位置づけられる。

VI おわりに

生業構造の変化と非農業戸籍への転換などの背景の元で、農民出身の幾らかの人々は、都市

住民に転身したにもかかわらず、都市での芝生や空き地で野菜を育てるという「アウトロー」的な行為をしている。すなわち、土地や故郷から離脱したとしても農に離脱しないという「離土離郷不離農」という事象が確認された。本研究はこうした不条理に見える都市共有地での農業という現象に着目し、農業するために自ら条件を整えようとし、または規制に非正面的に対峙している状況を明らかにした。特に農家肥の考察により、元農民たちは外発的要因により生活空間を都市に移ったとしても、以前の経験知を活かして農家肥の使用を主体的に維持している。農家肥及び農業が農民への意味付与は経済面を超え、新たな生活空間において、自ら「農的つながり」の再構築および自分のアイデンティティの再確認にその意味はあるのではないだろうか。調査事例の考察により、「農的つながり」は状況に応じて伸縮しているという実情も見えてきている。なお、「アウトロー」農業を通して「農的つながり」の再構築は「県」だからこそできることだと筆者は考えており、「県域社会」の視点と「アウトロー」農業と不可分な関係であることを強調したい。さらには、こうした都市での農家肥の使用が、中国の農民の肥料技術選択における主体性を裏付ける重要な事例になり得ることが示唆された。

注

- (1) 本稿は「アウトロー」農業という用語を使用するのは以下の理由がある。閻 (2019) の論文では、「アウトロー」的な行為を自己正当化する行動ロジックを説明しており、当事者に寄り添ったうえで彼らが「アウトロー」的な行為をどう自分の論理で正当化していくのかに着目し、対応・強調の意味で「アウトロー」という言葉を使用している。本研究も「アウトロー」が存在する原因を農民の内面から解釈的アプローチから接近しようとする研究であるため、「アウトロー」農業という用語を使用している。
- (2) 農民のマンションといった集合住宅への移住が政策により推進され、従来の農村空間にできた異なる新たな農村コミュニティのことを指す。土地制度、収入構造、戸籍など元のままで、住宅環境のみ「近代化」している。
- (3) 従来都市近郊にある農村が都市区域に区画されるとともに、コミュニティ形態（居住環境や全体の外見）が激変し、土地制度、収入構造、戸籍なども変化した。
- (4) 保護者が子供の進学に付き添うために学校の近くに寄り住むことを意味している。
- (5) 例えば、調査対象の南陵県において、家族戸籍を周辺農村から移入するために提出する資料として、①不動産所有証明並びに②家族成員身分と相互関係の証明（戸籍帳）が要求される（《安徽省戸政管理工作規範 第十一条》により）。県城内で不動産を購入すれば、戸籍の移入はできるため、都市住民に転身するハードルは比較的に低い。
- (6) 季 (2011) は中国都市における農民工という「第三集団」が生活する「第3空間」に着目し、農民工が移入先でいかに生活再編しているのかを明らかにした。
- (7) 一気に大都市の戸籍を取り、大都市の都市市民になることは難しいため、県城は中国都市化を推進する切口である。なお、「都市化」を中国語に訳すと「城市化」と「城鎮化」の二つある。「城市化」は発展段階に差のある広大な国土にどのように都市を配置するかという国土開発戦略としての意味を持つ。「城鎮化」は「三農問題」（「農業」の低生産性、「農村」の荒廃、「農民」の貧困を示す）や農民工の厚生水準をどのように高めるかを意識することによって生まれた望ましい都市の在り方を示す中国独自の造語である(三浦 2014)。ここで「都市化率」を使用しているが、中国語の「城鎮化率」に近い。
- (8) 都市の「第3空間」に住む農村出身の出稼ぎ労働者は、周辺の都市市民との間に戸籍の壁が

客観的に存在するほか、従来の生活慣習やアイデンティティもまったく異なる。そのため、農村出身者は都市に住んだとしても都市出身の都市人を自分と区別して「城里人（都市出身の都市人）」と呼ぶように、主観的にも「城里人」が自分たちと異なると思っている。物理的距離の遠近や戸籍の壁の有無といった客観的な差異だけでなく、本研究ではそれらに対応した「心情的差異」の有無に着目する。

(9) 2021 年南陵县政府正式ホームページデータにより。

(10) コミュニティとは違い、ここでの「社区」は中国都市の基層であり、街道弁事処（区政府の出先機関）と居民委員会（末端の住民自治組織とされる）は社区建設の重要な担い手である。

(11) 子供の送り迎えは中国に非常に普遍的な現象であり、小中学校は午前、午後で 4 回、高校午前、午後と夜で 6 回とも送り迎えすることもある。日本のニュースにもよく報道される。例えば yahoo ニュースでは「子どもの登下校は保護者送迎が当然、おばあちゃん出動も普通」に題した報道がある。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/11a0bf70662dcdf80da29dfa933de6653e620508> (2021 年 12 月 10 日に閲覧)

(12) 二十四節気の一つであり、秋の始まりを意味する。2021 年の立秋は 8 月 7 日である。

(13) 『南陵県都市管理局 2020 年活動のまとめ及び 2021 年の活動予定に関する報告（南陵県城管局関于 2020 年工作總結和 2021 年工作安排的報告）』

<https://www.wuhu.gov.cn/openness/public/6605361/29421071.html> (2021 年 11 月 29 日に閲覧)

(14) B 氏も公園の建設予定地の農地が取り除かれたあと、苗木が植えられているが、隅に一つの「菜秧子」を栽培している。

(15) 「交情」というのは、長期的に付き合っている相手に対して起こす、親しみの気持ちである。インタビューに出た「交情」は注（8）に書かれた「心情的差異」と深く関連する。つまり、同じ農村出身の人であり、「心情的差異」がないがゆえに、日常的に農業にまつわる会話が発生し、「交情」が出てくるのである。

(16) 農家肥というのは農民自分の経験により人畜糞便や農作物のわらなど現地で調達しやすいものを自分で簡易な発酵などの処理をした後に得られた自家製肥料を指す。その種類・数量が多く、コストが低いのが特徴であり、ほとんどの農家肥が有機肥料である。特に中国において、筆者の主調査地が属している江南地域では農家肥の使用の歴史が長く、建国後も主要な肥料としてしばらく使用されていた。

(17) こちらの顔出し写真の掲載は調査対象者の許可を十分得ている。

引用・参考文献

和文文献

秋津元輝 2014 「終章 食と農をつなぐ倫理を問い直す」 榊渥俊子・谷口吉光・立川雅司（編）『食と農の社会学—生命と地域の視点から—』ミネルヴァ書房、275—292 頁。

宇根豊 2007 『天地有情の農学』コモンズ。

閻美芳・南裕子 2019 『中国の村を問い直す—流動化する農村社会に生きる人々の論理』明石書店。

川瀬由高 2019 『共同体なき社会の韻律—中国南京市郊外農村における「非境界的集合」の民族誌』弘文堂。

- 季増民 2010 『中国近郊農村の地域再編—江蘇省昆山市開發区隣接地域を事例に（梶山女学院大学研究叢書）』 芦書房。
- 2011 「中国の都市周辺部に形成された『第3空間』」 『東アジアへの視座』 22 (4)、6-17 頁。
- 平井京之介 2012 「実践としてのコミュニティ：移動・国家・運動」 京都大学学術出版会。
- 前田比呂子 1998 「中国における戸籍の移転と経済的価値についての分析枠組み」 『一橋論叢』 120 (2)、236-252 頁。
- 三浦有史 2014 「中国「城鎮化」の実現可能性を検証する」 『JRI レビュー』 3(13)、41-66 頁。
- 村松賢・別所あかね・山崎崇拓・飯田晶子・横張真 2020 「福祉の観点に基づく逸脱行為としての河川敷での勝手耕作の実態解明」 『都市計画論文集』 55 (3)、721-728 頁。

中文文献

- 陳書平 2016 〈双軌並治：新型農村社区治理架构及困境〉 徐勇・鄧大才（編）《中国農村調査》、581-603 頁。
- 仇鳳仙 2014 〈从差序到单元：安置社区的管理再置研究—基于 NJ 市 D 社区的個案研究〉 《云南社会科学》 05、164-167 頁。
- 戴偉・陸文萍 2019 〈空间与社区治理：“占地种菜”现象的实践与思考〉 《山东农业大学学报》 2002 (4)、66-70 頁。
- 劉玉珍 2019 〈合作治理：新型城市社区居民的土地情感行動及治理模式〉 《深圳大学学报》 36 (5)、122-130 頁。
- 王婷婷 2013 《基于田园情結的城市居住区農業活动研究》 青島理工大学碩士論文。
- 張晨 2011 〈城市化進程中的“过渡型社区”：空間生成、結構属性与演進前景〉 《苏州大学学报（哲学社会科学版）》 032(006)、74-79 頁。